

“子育て支援”に関するとりくみ（1）

－養成校の現状－

澁谷 由美、古川 洋子
愛知学泉大学

Effort of Child Care Support (1)

－Current situation of Nursery School Teacher Education University Students－

Yumi Shibuya, Yoko Furukawa

キーワード：子育て支援 Child Care Support、養成校 nursery and kindergarten teachers、

はじめに

“子育て支援”は、2008（平成 20）年の幼稚園教育要領ならびに保育指針改訂のおりに、幼稚園や保育所におけるその役割が詳細に明記された。しかし、改訂から 5 年を経た今もなお、“子育て支援”のとりくみは、支援する側・される側の双方が、いまだ模索の状態にあるといえる。さらに、この改訂によって、保育所や幼稚園の役割が社会的に重要なものとして認められた一方で、保育者に求められる役割は増幅した。すなわち、社会の要請をいかに受けとめるべきかをふまえ、養成校における教育は、補うべき内容が増し、しかもそれは変化しつつある。

そのようななかで展開されている“子育て支援”に関する取り組みについて、本学でのとりくみを例にあげ、養成校の現状と課題を検証・考察する。

1 子育て支援における幼稚園や保育所の役割

（1）政策としての“子育て支援”

わが国における子育て支援政策は 1990（平成 2）年の「1.57 ショック」を契機に、1994（平成 6）年のエンゼルプランが策定されたことに始まった。1999（平成 11）年度を目標年次として地域子育て支援センターの整備などが進め

られ、さらに見直しを加え、2004（平成 16）年度を最終年度とした新エンゼルプランが策定された。出生率を問題視して少子化対策が練られ、子どもを生み育てやすい環境づくりに向けての対策が検討された。当初は保育関係に目標を定めていたが、雇用、母子保健、相談、教育等の事業も加え、幅広い内容となった。子どもが育つ環境の整備、子どもを育てる環境の改善を含めた総合的な目的へとその内容を変化させてきたのである。

（2）幼稚園ならびに保育所における“子育て支援”

1) 政策の反映

保育から教育へと“子育て支援”の目的がひろがり、2008（平成 20）年に幼稚園教育要領ならびに保育所保育指針は改訂される。そこには、幼稚園や保育所の特性ならびに専門性を生かした“子育て支援”の役割が求められている。少子化問題に端を発した 1994（平成 6）年のエンゼルプラン策定から 14 年後である。対象となる事業が拡大され、支援センターから地域の幼稚園・保育園・保育所等、既設の機関も政策の縛りを甘受せざるを得ない状況となる。次の文言にその政策は反映されている。

まず、幼稚園教育要領には幼稚園における子育て支援の必要性が次のように記されている。

「幼稚園の運営に当たっては、子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること。」(第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項 第2 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動 2)

保育所保育指針には、保育所における地域の子育て支援が明確に示された。まず、総則において“子育て支援”に対する保育所の役割を規定した。さらに、あらたに支援に関する章がもうけられた。

「保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである」(第1章 総則 2 保育所の役割 (3))

「保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第一章(総則)に示されているように、その特性を生かし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、次の事項に留意して、積極的に取り組むことが求められる」(第6章 保護者に対する支援 前文)

「地域の子育て支援に関する資源を積極的に活用するとともに、子育て支援に関する地域の関係機関、団体等との連携および協力を図ること。」(第6章 保護者に対する支援 1 保育所における保護者に対する支援の基本 (7))

「保育所は、児童福祉施設法第48条の3の規定に基づき、その行う保育に支障がない限りにおいて、地域の実情や当該保育所の体制等を踏まえ、次に掲げるような地域の保護者等に対する子育て支援を積極的に行うように努めること。

ア 地域の子育ての拠点としての機能

(ア)子育て家庭への保育所機能の開放(施設及び設備の開放、体験保育等)

(イ)子育て等に関する相談や援助の実施

(ウ)子育て家庭の交流の場の提供及び交流の促進

(エ)地域の子育て支援に関する情報の提供

イ 一時保育」(第1章 保護者に対する支援 3 地域における子育て支援 (1))

2) 現場における“子育て支援”の現状

幼稚園ならびに保育所は、本来子どもの教育・保育を目的として設置されている。しかし、近年は働く親が増え、幼稚園ならびに保育所は子どもを預ける場として利用されていることも多い。プライベートな時間を確保するために活用する保護者もいる。さらに、社会的な性差に対する認識の変容によって保護者のありようが変化して、子どもを預けなければ生活そのものが成り立たない保護者もいるだろう。幼稚園ならびに保育所の“子育て支援”は、いまや教育・教育の場というはたらきを超え、さまざまな事情に対応せざるを得ない状況におかれている。

改訂された幼稚園教育要領ならびに保育所保育指針は、現場ではどのように展開されているのか、ひとつの例をみていく。

古川は、名古屋市内の幼稚園において、その地域の未就園児と保護者が参加する「遊びの会」に携わっている。未就園児という語からもわかるように、園児と保護者に向けたものではなく、地域の住民に対して幼稚園を開放している。園は場を提供するのみならず、園長や主任等、保育職としての専門家のノウハウも提供する。幼稚園や保育所が、地域の子育て支援の拠点としての役割を担っているのである。

子育てに携わる保護者にとって、地域の幼稚園や保育所が、普段交流することのない人々と交わることのできる“場”となっている。“場”の存在が保護者を支援しているといっても過言ではない。また、触れ合いの場が準備されたことによって、保護者は共に子育てをする仲間や専門知識をもった保育者が身近にいることを知るきっかけを得る。ひとりではないことを実感し、子育ての不安を取り除く“場”としても機能する。

「遊びの会」の活動では、「親子で楽しめる活動を取り入れて欲しい」「普段から親子だけで過ごしがちなので子ども同士のかかわりを見たい」「季節にあった製作物を作りたい（七夕やクリスマス飾り等）」といった保護者からの様々な要望が耳に届く。希望・要望を口に出すことのできる“場”としてもはたらいている。保護者は、集うことによって、他者との関わりの中かで子どもを育てることができる。また、おのおのの得手・不得手をうまく活用して、さまざまな取り組みや活動も可能となる。

一方子どもは、親以外の大人と触れ合うことができ、さらに同じ地域に暮らす人々からさまざまな事を体験的に学ぶことができる。集団の中での遊びは、自発的な活動をうながし、多くの経験を積むことが出来るよう発育の手助けにもなっている。

これからの幼稚園や保育所では、単に教育や保育の場としての“運営“にとどまらず、地域の特性を生かし、また保育者の専門性を生かした“子育て支援の場”として期待されていることを視野に入れなければならない。すなわち幼稚園や保育所の役割は、本来の目的をもちつつ、ますます“子育て支援”としての役割は広がりを見せるであろうことが予測されるのである。

2 養成校における“子育て支援”教育

養成校では、幼稚園や保育所で働く幼稚園教諭や保育士を育てることを前提にカリキュラムが構成されていることは言うまでもない。ここでは、本校において“子育て支援”とは何かを直接的に教授している授業についてふれておく。

（1）授業の概要

1) 該当科目等

- ・科目名：「保育原理」4/15

内容概略：子育て支援と保育者の役割を考える

受講対象：1年生前期

- ・科目名：「保育内容総論」13,14/15

内容概略：保育の現状と課題

受講対象：1年生前期

2) 教授内容

まず、幼稚園教諭として、また保育士としての職務は何かを教育する。職務理解にはじまり、さらに昨今の保育の場の現状把握、ひいては“子育て支援”に関する認識と、多岐にわたる内容を含み、教授しなければならない。

なかでも、“子育て支援”に関しては、保育の現場で目にする子どもたちの日常のみならず、その子どもたちの保護者ならびに子どもと保護者の関係、さらに言うならば、彼らを取り巻く地域との関係をも把握したうえで、保育者は対処できなければならないのが現実である。むしろ、それらに対応できなければ仕事に就けないわけではない。しかし、現在の保育現場は日進月歩で様変わりしていることを、養成校として学生に伝えていかなければならない。

学生たちは、保育者の役割が、保育所や幼稚園に通っている子どもたちに対するものに限定されたものではないことを学び、一様に驚く。保育の対象は18歳未満のすべての人であり、保育者の役割は、保護者など、保育所や幼稚園に通っている子ども以外、つまり大人との関わりにもすでにおよんでいることを初めて知る。そして、単に子どもを支援することだけではなく、大人と関わり、さらに大人を“支援”することも保育者としての仕事であることを学ぶ。それらの学びを経て、保育者に求められていることの多さに初めて気づくのである。

（2）授業後の感想（自由筆記）

ここで、自らがめざす職業について、授業受講後にとったアンケートを抜粋して、学生らの認識の変化をみていく。

- ・「保育者は子どもが好き」だけでなるのは難しいと思った。子どもとの触れ合いもだけど、保護者との関係性も大切だ。親支援は難しいと思うが保育者としての仕事だと知ったから、頑張って保護者に信頼される保育者になりたいと思った。
- ・大学に入る前の目標は「いつも笑顔で元気な保育士」でしたが、子どもが想像力豊かに園生活を送ることができるよう、物作りの得意な保育士を目指します。そして、年代に応じた保育ができるような保育士や、子どもだけではなく保護者と一緒に子ども

の成長を感じることができるようになりたいです。

- ・自分が思い描いていた、優しく笑顔の幼稚園の先生とは違い、子どもにとっても保護者にとっても先生の存在がとても重要だと知った。どうしたら保護者を支援できるのかわからないから、とても不安だけど、幼稚園の先生になりたいから頑張りたい。
- ・先生の仕事がたくさんあることがわかった。私が大切にしたいことは、親の話に耳を傾け、気持ちをくみ取って、できるだけ保護者の力になってあげたいと思う。子どもと親が穏やかに過ごせる手伝いがしたい。
- ・教科書を読んで先生の話聞いて、保育者の仕事がたくさんあることを知った。想像以上に大変な仕事だと思った。子どもと遊ぶことはできても、保護者とは接点がないから、どうやって話をしたいかわからないし、色々な保護者がいると聞くから心配だ。

(3) 分析と考察

入学したばかりの学生に「なぜ保育者になりたいのか」を尋ねると、「子どもが好きだから」「高校で職場体験に行ったら子どもと遊んで楽しかったから」「幼稚園の時の先生が優しかったから」といった答えが返ってくるが多い。動機はどうであれ、授業ならびに実習を経て彼らは現実に向き合うことになる。

先のアンケートからも、「子どもが好き」だけではいけないようだ気づき、「思い描いていた笑顔の幼稚園の先生」というのはほんの一面で「先生の仕事がたくさんあり」「想像以上に大変な仕事」のようだとして認識するに至っていることがわかる。

授業を通して学生は、保護者への対応力は保育者にとって求められる資質であると学び、理解する。しかし一方で、保護者との関わりは大きな不安材料となっているようだ。学生の感想にあるように、保育者の仕事が増大している事を知り、不安になる気持ちもわからなくない。

幼稚園や保育所が地域の子育て支援の拠点としての役割を求められる中、養成校では、その役割について、できうるかぎり伝え、教育する必要がある。さらに、保育職の業務を離れた

専門職としての役割も、情報として提供しなければならない。

3 “子育て支援”に関するとりくみ（本学の場合）

保育者を目指す学生に子育て支援の学びの機会をどのように提供するかは、養成校における課題のひとつである。地域の子育て支援センター等に出向く、大学に地域の子どもと保護者を招く、付属園に協力を依頼する等、養成校はとりまく環境を考慮してさまざまな方法を模索し、学生に“子育て支援”の体験を準備すべく工夫している。

“子育て支援”を体験するには、子どもたちと直接ふれあったり子どもたちの様子を観察するだけでなく、子どもと保護者との関わりのおかげでの保護者や子どもを観察する必要がある。しかし、子どもだけを観察できる場や、保護者だけと向き合う場は数多くあっても、子どもと保護者の双方が共にいる場所を学生に提供することは困難なのである。しかも、ボランティア等で個人的に体験の場をもつことができたとしても、養成校としての教育を考えると、それはのぞましい教育環境とは言い難い。

本学こどもの生活専攻の学生は、「岡崎げんき館（岡崎市 PFI 事業）」において“子育て支援”に関するとりくみを行っている。「岡崎げんき館」（以下、げんき館）での活動は、数回ではあるが子どもと保護者に関わる経験ができる場となっている。

(1) とりくみのための準備

“子育て支援”教育として、座学で子育て支援について学んだ学生は、げんき館での活動において実際の“子育て支援”の場を体験する。

具体的には、“子育て支援”そのものを体験するわけではなく、“子育て支援”として開放されている場所に出向き、保護者と子どもの両者を前にして表現活動を行う。グループ活動であり、しかも対象となる保護者と子どもは毎回異なる。

ちなみに、“子育て支援”に関するとりくみであるげんき館での実践は、授業外活動として予定されている。

1) 該当科目等

- ・ 科目名：「保育内容（表現 A）」1,2,13/15
内容概略：環境構成を考慮した教材研究

受講対象：1年生後期

2) 教授内容

この授業では主に、子どもが心躍るような環境構成を整えうる保育者育成をめざした教材研究を行う。授業の延長線上にあるげんき館での活動は、保育者をめざす学生にとって貴重な実践であり、次年度から始まる実習をふまえた体験をも兼ねている。

げんき館での活動についてグループで話し合う前に、子どもと保護者を前にして何をやりたいか尋ねるところから“子育て支援”に関するとりくみは始まる。

（2）げんき館での活動にむけた準備（その1）

げんき館での活動は、年間を通して年度のはじめに計画する。本学が担当する今年度の活動は9回あり、そのうちの4回分を1年生が担当する（他5回は3年生が実施）。1年生は子どもの前で初めて行う活動ということを考慮して、初回を12月25日（クリスマス）に設定した（他に2/6、3/6、3/20に実施予定）。

まず、げんき館でどのような活動を行ってみたいか、記述式のアンケートを行った。なお、活動はグループで行うが、アンケートは個々に回答させている（抜粋して掲載。原文のまま）。

- ・ げんき館には幼稚園に入る前の子どもが多いという話なので、簡単な絵本や紙芝居の読み聞かせがやりたいです。ただ、読むのを聞いてもらうのではなく一緒に楽しめるような絵本や紙芝居を読みたいです。
- ・ ただ、遊びだけでなく、子どもひとりひとりの様子とか動きをしっかり観察しておきたい。
- ・ げんき館に行く日が12月25日だから、マツボックリを使った、クリスマスリースを作りたい。☆
- ・ 子どもも保護者の人も楽しめる手遊び。
- ・ 紙飛行機作りやかくれんぼをしたい。体を使った遊びがしたい。
- ・ 「手遊び」や「紙芝居」をやってみたい。

色々話をして、短い時間の中でコミュニケーションをとっていききたい。小さい子どもと触れ合える貴重な時間のため、無駄のないよう準備をしたい。

- ・ 私は人前だととても恥ずかしいです。まずは、人前でも話せるように努力したい。
- ・ 子どもだけではなく、親もいるので緊張すると思う。何をやったらいいかわからない。
- ・ まずは、子ども達と仲良くすることからはじめていききたいです。そして、子ども達がやりたいことをやり、子どもや自分だけではなく、保護者や学生も楽しめるような遊びにするために、自分から進んで行動していく。
- ・ 体を動かさず遊びや、みんなで手遊びをしたい。でも、経験したことがないので緊張すると思う。
- ・ 手遊び、輪になって踊るなどみんなで楽しめることをしたい。
- ・ 全く知らない子ども達と触れ合うことは不安であるが、少しでも子どもが笑顔になれるように遊びたいです。
- ・ 子ども達と遊ぶことにも興味があるが、お母さん達と話をしてみたい。
- ・ 子どもやその保護者の人と楽しい時間が共有したい。
- ・ 一緒に遊ぶ子どもの年齢に合っている遊びをして、子ども達全員が楽しむことができること。
- ・ ふだん、子どもと触れ合うことがないので、まずはたくさん子どもと触れ合って、子どもの立場になって考えてみたい、子どもがいるからできることをしたい。子どもがどんなことができるのか、自分の目で確認したい。
- ・ 読み聞かせや、折り紙、ぬり絵などをやってみたい。
- ・ 絵本を読む。手遊びをする。指人形をする。たくさんやりたいことはあるが、人前でどうやってやったらいいのかわからない。
- ・ 子ども達が喜んでくれそうな劇をしたい。
- ・ 絵本の読み聞かせや、紙芝居などをやってみたいです。グループでとりくむので、一人ではできないことを考えてやってみたい

と思っているけど、今は何ができるかわかばないです。子どもが楽しんでくれることをやりたいです。

- ・ 「手遊びや」読み聞かせしかかわかばない。何をしたら子どもが喜ぶのか今はかわかばない。グループで活動をするといっていたから、みんなと話し合っただけ。

(3) げんき館での活動にむけた準備(その2)

前掲したアンケートの後に、すでに今年度のげんき館活動で終了している3年生の活動を映像で見せた。見せた後に、再度アンケートを行った。以下がDVD鑑賞後の回答である(抜粋して掲載。原文のまま)。

- ・ 親子で体を使った遊びや、人と人がかかわる遊びをしたいと思った。☆
- ・ 子どもが知っている曲で踊ったり、げんき館にきている子ども達の年齢にあった活動を考えていかないと、子どもはつまらないと思った。おとなしい子にどんなふうに声をかけたらいいのかわからないし、どうやってお母さんたちに話しかけていいのかわからないと思った。
- ・ 棒立ちしている子どもがいたから、興味を示すようなことを考えてやりたい。時間配分や、内容を考え、しゃべることも考えないといけないので、げんき館までに練習が必要だと思った。そして、みんなに声をかけられるようにしたいと思った。
- ・ 思っている以上に、みんなが色々な動きができていて、すごいと思った。ノリノリな子や、冷めている子など、なるべく温度差のないようにできると良いのだろうけれど、それは本当に難しいことだと思った。
- ・ DVDをみて、子ども達の反応を見てやらないとあきってしまう子もいることがわかった。一つのことを長くやるのではなく、色々なことをやりたいと思いました。親子で参加できる手遊びや、お母さんと一緒に体を動かすことをやってみたくと思いました。
- ・ 子どもは、好みがあって興味を示す内容に興味を示さない内容があるとわかった。お母さんと楽しそうに手遊びをしていたから、お母さんと子どもが楽しめることや遊びを

考えたいと思った。知っている曲には興味をもっている子が多かったから、みんなが知ってそうな曲を使った踊りもやりたい。

- ・ 一番思ったことは、自分たちが楽しそうにやることで、子どもが影響をうけて「やりたい!」と思ってやってくれることがうれしいことだとおもった。だから、自分の表情や動きを気にしようとおもった。保護者がいるから恥ずかしいけど、楽しそうに参加している子どもを見て、わくわくするようなことを考えたいと思った。
- ・ 年齢が様々でみんなが同じように楽しむことはできないかもしれないけど、できたら年齢別にできる事を考えてやってみたくと思った。踊っている子ども達は、楽しそうだったけど年齢が低い子には難しい部分があった。どうしたら子どもやお母さんも参加して一緒におどってくれるかを考えて、一緒に楽しめることがしたいと思った。

(4) 分析と考察

学生にとって、子どもの前での活動そのものが初めての経験である。

「どのような活動がしてみたいか」という問いかけでは、活動の場も想像できず、ましてや子どもの前で自分に何ができるのだろうと途方にくれる学生が多い。「何をすれば良いのかわからない」「経験したことがないので緊張する」など、希望を問われただけで、すでに緊張して不安をおぼえている学生もいる。

また、「一緒に楽しむ」「楽しい時間を共有したい」といった回答からは、前掲2-(3)に記した、「子どもが好き」だけで保育職は勤まらず、「想像以上に大変な仕事」のようだと前期の授業で認識したことなどすっかり忘れ、子どもが目の前にいるだけで「楽しく」、「楽しめる」と思っているようにも受けとれる。保育職に就くこととげんき館での活動は、まったく別物と捉えていると解することもできよう。

子どもに何かをする、つまり、自分から発した一方的な方向性しか文面から読み取れない回答が多いことも気になる。さらに、保護者に対して意識を向ける学生は、ことのほか少ない。

学生・教師双方が、その活動に向けて準備を

する必要がある。

DVD の鑑賞は、有効な手だてであった。いずれ自分が活動することになる場をあらかじめ確認でき、その場で活動している先輩の姿を自分に置き換えることもできる。子どもの反応も観察できる。自分からのアプローチだけではなく、自分と子どもとの関係、子どもと保護者との関係、子どもと保護者とに関わる自分のあり方等、学生の視野の広がりをも感じる。

そもそも、自由記述の文面そのものが長く、具体的になっている。また、用いている「楽しい」の語句ひとつとっても、使い方に歴然とした違いがある。「楽しそうにすることによって子どもがいきいきと活動する」という発見の中に「楽しそうにする」という自発的で能動的な意志が明白である。DVD 鑑賞前の「一緒に楽しむ」「全員が楽しむ」というように（自分だけではなく他者も共にという視点は認められるが）温かみのある言葉の中に、自分が自立する意志はまったく感じられない。ほのぼのとした感覚が込められているだけに受け取れるのである。

なお、(2)と(3)の回答にある☆印は、同一学生の回答である。何がしたいか、何ができるかを考えたあげくに導きだされたクリスマスリースの「装飾」としての表現は、DVD 鑑賞後には「親子で」「体を使った遊び」「人と人がかかわる遊び」という活動としての表現へと変わっている。

百聞は一見に如かず。求められていることは何か、実際にできるかどうかはさておき、先輩の活動と現場の様子から、学生たちが気づきを得たことは何よりもの収穫である。

おわりに

学生は、げんき館での活動を具体的に伝えたときに座学で客観的に授業を聞いていたときは意識が大きく変わる。実際に、場に適した声の大きさや、子どもに伝わる話し方、間の取り方など、実際の練習も不可欠となる。教師は学生の不安を軽減するためにも、自信をもって取り組むことができるような指導が必要となる。

また、子どもの前で発表するだけの活動では

なく、学生と教師とが同じ目的をもって活動に取り組む事が、学生の学びに繋がるのではないだろうか。

具体的にげんき館での活動内容を考える中で、「この活動をしたら一緒に喜んでくれるかな」「楽しい気持ちを味わってほしいな」という願いを抱きながら、子どもの発達や理解に沿うものであるかを学生自らが検討できるよう導きたい。そして、それらの実践を糧にして、今後彼らが学ばなければならない保育指導案の立案等へとつなげていきたいと考えている。

げんき館での活動を通して、親子と積極的に関わり、親子の様子を観察する体験を通して、子育て支援の意義や必要性について学生が主体的に学ぶことができるような活動展開を目指したい。

養成校の持つ課題は、そのほとんどが“子育て支援”を体験する場・機会がないことである。その点、本学学生には場も機会も提供されており、養成校のなかでも恵まれた環境が準備されているといえる。その環境を最大限に活用して、現行の活動にとどまらず、次なる活用についても考えなければならないと思っている。

“子育て支援“教育を経て、“子育て支援”そのものに関わる時は、すでに専門家としての関わりが要求される。その要求にこたえうる教育が準備できているかと問われたならば、こたえに窮するのが現状である。目下の課題は、次の“子育て支援“教育である。

- ・ 子育て支援を単なる託児と混同しない学生の意識づくり。
- ・ 子育て支援の専門家としての保育者育成。

後者は、学生が卒業して現場に出たときに、本学が行ってきた教育の成果として明白になる。前者も、恥ずかしながら本学学生にとっては、次なる次元の教育である。すでに実践を終えた学生（3年生、4年生）ですら、げんき館での活動が“子育て支援”として行われているものであるとの認識が希薄である。いまだに、単に「親子の前での活動」としてしか捉えられていない者もいる。げんき館での活動が、すなわち“子育て支援”であるとの意識化が急務である。DVD 鑑賞前後の学生のアンケート記述内容の変容に確認されたように、意識させることは、

かなり重要であろう。

養成校として、ますます広がりを見せるであろう“子育て支援”に応ずることのできる保育者を育てるために、今後さらにさまざまな方途を検討する必要がある。

参考文献

- 厚生労働省：保育所保育指針（2009）
 文部科学省：幼稚園教育要領（2009）
 文教科学技術課（東弘子）「新しい子育て支援制度の検討状況-就学前施設を中心に-」『調査と情報』、**788**、1-10（2013）
 関口はつ江編著『保育の基礎を培う保育原理』、萌文書林（2012）
 梶浦真由美、鍛冶紀美子、清水貴子「保育者養成校における子育て支援に関する研究（1）-学生のレポート分析を通して-」北海道文教大学研究紀要、**30**、45-54（2006）
 古賀理、小川鮎子、牟田常文、松本勇治、村岡直子、東内瑠里子、吉牟田美代子「保育士養成校による子育て支援者養成の展開と課題」佐賀女子短期大学研究紀要、**42**、11-18（2008）
 高橋実、岡圭子「子育て支援のための学生教育の成果と課題～短大付属幼稚園未就園児の会を活用して～」福山市立女子短期大学紀要、**34**、95-103（2008）
 椎山克己、萩尾ミドリ「保育者養成校における子育て支援活動の意義について」久留米信愛女学院短期大学研究紀要、**32**、41-48（2009）
 田頭伸子、宮田保江「保育者養成校における子育て支援活動-体験学習としての実践-」広島文化学園短期大学紀要、**42**、51-58（2009）
 萩尾ミドリ、池田可奈子、椎山克己「保育者養成校における子育て支援活動の実際と学生への教育的効果」久留米信愛女学院短期大学研究紀要、**34**、117-124（2011）
 浦川末子「地域における保育者養成校の役割～子育て支援体制の構築に向けて～」長崎女子短期大学紀要、**36**、30-36（2012）
 今泉明美、有村さやか、小川晃、小澤祐子「子育て支援における音楽表現遊びの実践についての一考察～地域子育て支援の現状と課題の分析～」小田原女子短期大学研究紀要、**42**、8-20（2012）
 近藤真理子「地域の子育て支援のニーズの変化と今後の課題-支援の充実とその内容についての一考察

- 」和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、**22**、157-166（2012）
 木村龍平、花園誠、大沢裕、神戸洋子、浅倉恵子「学生の『子育て支援活動』参画による保育実践力の教育効果の検討」帝京科学大学紀要、**8**、203-212（2012）
 八重樫牧子「児童館における子育て支援のグループ活動（グループワーク）に関する調査」福山市立大学教育学部研究紀要、**1**、111-122（2013）